

カルメルの乙女の書

EL LIBRO DE VIRGEN DEL CARMEN

サマエル・アウン・ベオール

イシス、アドニア、インソベルタ、アスタルテ、マリア、マーヤー、
海の乙女、そしてノスティックの間では、ラーミーオー。

主の祈り

天（I. A. O.）にいますわれらの父よ、
 御名^{みな}があがめられますように。
 御国^{みくに}（内的世界）がきますように。
 みこころが天に行われるとおり、
 地にも行われますように。
 わたしたちの日ごと^{しよくもつ}の食物を、
 きょうもお与えください。
 わたしたちに負債^{ふさい}のある者をゆるしましたように、
 わたしたちの負債をもおゆるしてください。
 わたしたちを試みに会わせないで、
 悪しきものからお救いください。
 アーメン。

この祈りは、われらの、主キリストが後世に残したものであり、道の帰依者が「いと高きところ」の神の恵みを求められるよう、七つの聖なる祈願を含んでいる。

ノスティックは、聖なる父の「みこころ（意志）が天に行われるとおり、地にも」行わなければならない。しかし、一般に人間は自分たちの意志を、すなわち反対のことを神が行うよう、神を呼び求め、そして祈る。

アベ・マリア

アベ マリア！
 恵まれた女よ、おめでとう、
 主があなたと共におられます。
 あなたは女の中で祝福されたかた、
 あなたの胎の実も祝福されています。

主の母、処女ラーミーオー、
 罪深い我々のために、
 いまも、そしてエゴの死のときもお祈りください。
 アーメン。

すべてのノスティックは、この祈りと主の祈りを就寝前や危険に瀕した時に行うとよい。

第1章

カルメルの乙女

カルメルの乙女は、世界の、神聖なる救世主の母である。

いつの時代においても、聖母は多くの芸術家たちによって賛美されてきた。しかし、このすばらしい聖母の意義を誰が明確にできたであろうか。ミケランジェロの“羽根ペン”も、レオナルド・ダ・ヴィンチの『マドンナ』も、処女マリアのイメージを正確に描写するには至らなかった。また数多くの彫刻家がカルメルの乙女に人格を与えようと試みてきたが、誰一人として、かの偉大なる「光の子」の容貌を完全には表現できなかった。

もしあなたが、霊的な眼で、聖母の言語に絶するその姿をじっと見つめたならば、ダイヤモンドやルビー、エメラルドを連想させるようなものは何一つ見えないだろう。そして絹や紫の衣に身を包んだ、あのナザレのイエスの聖母—マリアのイメージは完全に消え失せるだろう。マリアは、多くの絵画に描かれているような見目麗しい女性ではなかった。あなたの霊的な眼で捕らえることのできるのは、荒野の太陽に焼かれ、小麦色の肌をした一人の乙女だけである。呆然と驚いている我々の眼の前で、すらりとした背の高い魅力的な女性の姿はかき消え、その代わりに出現するのは、小柄でほっそりとした、素朴な容貌の女である。小さなうりざね顔に愛嬌のある鼻、上唇は心持ち突き出ている。それに広い額の下にはジブシーの

眼が光っている。

この質素な女性はこげ茶色のチュニックを着て、皮のサンダルをはいている。エジプトの地を目指し、アフリカの荒野を横断して旅をするマリアは、古くなったぼろぼろのチュニックを着、汗まみれで、うす黒い顔をしている。さながら放浪者のようである。

マリアの姿は、今日パリのノートルダム大聖堂を飾っている、ダイヤモンドを配し、紫の衣をまとったあの像とは異なる。また、まっ白い指をし、純金を散りばめ、教区教会の聖体行列の雰囲気をもり上げる、あの像とも違う。

我々の村では、教会の鐘が教区にある市場に鳴り響いていたが、その教会の豪華な祭壇で、子供の頃から仰ぎ見てきた、あの忘れられない美しい像ともマリアは違うのである。

魂の感覚で捕らえることができるのは、荒野の陽に肌を焼かれた、小麦色の乙女一人だけである。

魂の視覚の前で、幻想はことごとくかき消え、代わりにしおらしい放浪の娘、生身の、質素な姿の女が忽然と現れる。

マリアはアンナの娘として生まれた。子供のとき、純潔の誓いを立てるために、母親アンナに連れられてエルサレムの神殿^{のほ}に上った。マリアはそこでヴェスタの巫女の一人となったのである。

貴族の家に生まれたマリアは、ヴェスタの巫女として神殿に参入する前には、多数の求婚者がいた。その中には、裕福で身なりの立派なハンサムな青年もいたが、誰の申し込みも受け入れなかった。マリアの心はひたすら神にのみ注がれていたのである。これらのことから、彼女は何の不自由もなく、快適な環境で育てられたということがわかるだろう。

また言い伝えによると、マリアはエルサレムの神殿のためにじゅうたんを作ったが、それはバラに変わったという。

彼女はレビ族の秘密の教義を知っていた。エルサレムの神殿の回廊で、教育を受けたのである。——その回廊は東洋椰子の茂みに囲まれ、森厳な日陰となっていた。今日では、その椰子の木陰で、荒野を旅してきた年老いたラクダ飼いたちが休息をとっている。

マリアはエジプトの密儀に参入し、ファラオの叡智を学んだのである。そしてオリエントの灼熱の炎で焼かれた、古代キリスト教の聖杯でワイン

を飲んだ。

今日知られているカトリック教は、ローマ皇帝たちの威厳あるローマの七つの丘を越えたところでは、ほとんど知る者さえなかった。古代エッセネ派が知っていたのは、キリスト教の古代の教義、殉教者たちの教義、聖ステファノがそれゆえに殉教したあの教義だけである。

この神聖なキリスト教の教義は、エジプト、トロイ、ローマ、カルタゴ、エレウシスなどの密儀の中に、秘密裏に保存されてきた。

キリストの行った偉大な功績は、エルサレムの石だたみの公道で古代の教義を説いたことである。

そして、世界の神聖な救世主の母として神に指名されたのは、カルメルの乙女、マリアであった。

* * *

第2章

受胎告知

六か月目に、御使ガブリエルが、神からつか^{みつか}わされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとに来た。

この処女はダビデ家の出であるヨセフという人のいいなずけになっていて、名をマリアといった。

御使がマリアのところにきて言った。「恵まれた女よ、おめでとう。主があなたと共におられます」。

この言葉にマリアはひどく胸騒ぎがして、このあいさつは何のことであろうかと、思いめぐらしていた。

すると御使が言った。「恐れるな、マリアよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい」。
(『ルカ』 1:26-31)

そこでマリアは御使に言った。「どうしてそんな事があり得ましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」。

御使が答えて言った。「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生まれ出る子は聖なるものであり、神の子と、

となえられるでしょう」。

(『ルカ』 1:34-35)

そこでマリアが言った。「わたしは主のはしめです。お言葉どおりこの身に成りますように」。そして御使は彼女から離れて行った。

そのころ、マリアは立って、大急ぎで山里へむかい、ユダの町に行き、ザカリヤの家にはいってエリサベツにあいさつした。エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどった。エリサベツは聖霊に満たされ、声高く叫んで言った。

「あなたは女の中で祝福されたかた。あなたの胎の実も祝福されています。主の母上がわたしのところにきてくださるとは、何という光栄でしょう。ごらんなさい。あなたのあいさつの声がわたしの耳に入ったとき、子供が胎内で喜びおどりました。主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」。

すると、マリアは言った。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう。力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。そのみ名はきよく、そのあわれみは、代々限りなく主をかしこみ恐れる者に及びます。主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさい。主は、あわれみをお忘れにならず、その僕イスラエルを助けてくださいました。わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とをとこしえにあわれむと約束なさったとおりに」。

マリアは、エリサベツのところへ三か月ほど滞在してから、家に帰った。

(『ルカ』 1:38-56)

いにしえの時代、人類すべてが聖霊のわざと恩寵によって子を宿した。その当時は無痛分娩であった。聖霊は神聖な天使たちを遣わして、寺院の広大な中庭で男女を結びつけたのである。

性行為は、天使たちによって導かれ、それは寺院でのみ行われた秘蹟(サクラメント)であった。地球上で生をもつ必要のある霊が、肉体を創造するために行われたのである。この時代、陣痛はなかった。聖霊のわざと恩

寵による受胎だったので、妊婦は痛みを伴うことなく出産した。

しかしながら人間が天使たちの言うことを聞かなくなり、聖霊に対して罪を犯したので、聖霊は女に言った。「あなたは苦しんで子を産む」。

さらに男に言った。「あなたは額に汗して働き、妻子を養わねばならない」。

(『創世記』 3:16-19)

アダムとは、いにしえの時代の男性すべてを指し、イヴとは、その同時代の女性すべてを指している。

マリアは純潔と聖性の道をずっと歩んでいたもので、天使から子をはらむだろうと知らされて、驚いた。しかしマリアは彼女自身が手本となって、純潔の道を我々に教えてくれた。

今日では、結婚は姦淫(性エネルギーの消耗)するための許可証となってしまった。男も女も聖霊にはみじんも関心をはらわず、動物的快楽だけを通して生殖している。聖霊の許可なく行われる性交は、すべて姦淫である。しかし現代の人々は、いにしえの教義からあまりにも遠く離れてしまい、それを理解したいとさえ思わなくなった。その教義とは、イエスの母、処女マリアが知っていたものであり、シオンの無敵の壁のそばでキリストが説いた古代の教義である。

古代の賢者たちはみな、聖霊のわざと恩寵によって子をもうけた。ザカリヤは、天使から洗礼者ヨハネの生誕を知らされて驚いた。このヨハネもまた、聖霊のわざと恩寵によって誕生したのである。

天使が、すでに年老いた妻が一人の子をはらんでいる、とザカリヤに知らせた。その聖書の一説を見てみよう。

さてザカリヤは、その組が当番になり神のみまに祭司の務をしていたとき、祭司職の慣例に従ってくじを引いたところ、主の聖所にはいって香をたくことになった。香をたいている間、多くの民衆はみな外で祈っていた。すると主の御使が現れて、香壇の右に立った。ザカリヤはこれを見て、おじ惑い、恐怖の念に襲われた。そこで御使が彼に言った。

「恐れるな、ザカリヤよ。あなたの祈りが聞きいれたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。彼はあなたに喜びと楽しみとをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。

彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされている」。

（『ルカ』 1:8-15）

いにしえの偉大なる聖者はみな、聖霊のわざと恩寵によって生まれた。正直で誠実な夫婦はみな、聖霊のわざと恩寵によって妊娠すべきである。真のクリスチャンでありたいと望むならば、夫婦は聖霊に祈り、受胎告知を願わなければならない。そうすれば神の御使が夫婦の夢の中に現れ、性交を行うべき日時を告知してくれるであろう。

したがって、子供はみな、生まれたときからずっと美しく純粋であろう。なぜなら聖霊のわざと恩寵によってはらまされたからである。

我々は肉欲を制し、結婚の清らかさと神聖さを培う必要がある。

すべての人は、結婚を重んずべきである。また寢床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする（性エネルギーを消耗する）者をさばかれる。

（『ヘブル人への手紙』 13:4）

また、一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行（性エネルギーを消耗するよう）な俗悪な者にならないようにしなさい。

（『ヘブル人への手紙』 12:16）

* * *

第3章

処女懐胎

エルサレムの神殿には、レビ族の祭司である三十三名の男性がいた。ナザレのイエスの父ヨセフは、ソロモン神殿の三十三名の長老のうちの一人であった。

受胎告知の後、大祭司は神殿の三十三名の全祭司に自分の杖を祭壇の後ろに置くように命じた。そして、マリアの夫となるべき者の杖には、翌朝花が咲いているであろうと言った。

各祭司は一人ずつ順番に、祭壇の後ろに自分の杖を置いていった。最後に杖を置かねばならなかったのは祭司ヨセフであった。彼は高齢であると申し立てて大祭司の命令に従おうとはしなかったが、逆らうことができずに祭壇の後ろに自分の杖を置いた。

次の日の朝早く、祭司たちは杖を取りに祭壇のところへ行ったが、そのときヨセフの杖に花が満開に咲いているのを見て驚いた。このようにしてヨセフはマリアの夫に選ばれたのである。

カルメルの乙女は神殿から連れ出され、受胎のときを待つためにエルサレムの、ある信頼のおける市民の家にあずけられた。

世界の神聖な救世主に肉体を提供するために、結婚式の祭壇上の捧げも

のとしてその夫婦が性行為をいつ行うか、その日時を天使ガブリエルは選んだ。

マリアは出産前も、出産時も、出産後も、処女であった。なぜなら彼女は霊的に処女であり、受胎は聖霊のわざと恩寵によって確実に行われたからである。

天使の命令によって行われる性行為から、聖霊のわざと恩寵によって子供が生まれる。

純潔な人々の性行為は純潔であり、淫らな人々の性行為は淫らである。性行為は天使の目で見れば天使的であり、邪心に満ちた目で見れば悪魔的である。天使の命令によって性行為が行われるとき、それは神聖である。しかし悪魔の命令によって性行為が行われるとき、それはサタン的である。

マリアは無痛分娩であった。なぜなら聖霊のわざと恩寵によって子をはらんだからである。そして世の夫婦は、マリアとヨセフの例にならって、「性エネルギーを消耗せずに」聖霊のわざと恩寵によって懐胎することができる。

これは賢く美しい子の誕生を可能とする驚くべき鍵である。最も重要なことは慎みを知ることである。そして聖霊と聖天使ガブリエルに夢の中で受胎告知をしてくれるように日々祈ることである。そのとき主の天使は、夫婦が受胎の聖なる行為を行える日時を夢の中で明かすだろう。

聖霊によるこの受胎は各家庭を楽園に変え、愛のまばろしは消え去り、幸福の離れることはないであろう。

天使ガブリエルへの祈りは、次のように行う。

「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしための忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」。

(『サムエル記上』 1:11)

第4章

山

我々は肉体をまとった霊である。肉体は霊の衣にしかすぎない。肉体は思考しない、思考するのは霊である。肉体は愛さない、愛するのは霊である。肉体は望まない、望むのは霊である。

肉体は霊の衣にすぎない。睡眠中、霊は肉体から離脱して、よく知っているすべての場所を訪れる。また睡眠中に神聖な福音書が語っている聖なる山を彷徨する。聖書はその山について次のように語っている。

これらのことを話された後、八日ほどたってから、イエスはベテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

祈っておられる間に、み顔の様が変わり、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。すると見よ、ふたりの人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤであったが、栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについて話していたのである。

ベテロとその仲間の者たちとは熟睡していたが、目をさますと、イエスの栄光の姿と、共に立っているふたりの人を見た。

このふたりがイエスを離れ去ろうとしたとき、ベテロは自分が何を言っているのかわからないで、イエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。

一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。

彼がこう言っている間に、雲がわき起って彼らをおおいはじめた。そしてその雲に囲まれたとき、彼らは恐れた。

すると雲の中から声があった。「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」。

そして声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた。弟子たちは沈黙を守って、自分たちが見たことについては、そのころだれにも話さなかった。

翌日、一同が山を降りて来ると、大ぜいの群衆がイエスを出迎えた。

(『ルカ』 9:28-37)

福音書の語っている山とは、宇宙のことである。睡眠中、すべての霊は山を彷徨し、様々な場所を訪れ、ハートの導くところへと赴く。夢の中で、我々の霊は遠くの存在と話をし、他の霊と語らい、天使と会話することができる。

キリスト、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが山に登って祈り、キリストが彼らの目の前で変容したと言われているが、そのことについて我々が理解しなければならない点は、肉体を離脱した霊が山で祈っている間、生身の肉体は休んでいたということである。

すべての人間は自由に山を訪れることができる。重要なことは、我々が肉体を持つ霊であり、意のままに肉体に出入りすることができるということを理解することである。

クリスチャンは誰でも、肉体から意のままに離脱することを学ぶことができる。

◆ その鍵は次のとおりである。

寝床に横になり、うとうとし、まどろみ始めたら目を覚まさないように注意をして、ゆっくりと寝床から起き上がる。それから部屋を出て、浮くつもりで軽くジャンプする。そして飛び上がったなら、それぞれ自分のハートの導くところへ行くことができる。

母親は遠くのわが子を訪ね、顔を見て話すことができるだろう。夫は、遠く離れた妻を訪れ相対することができるだろう。妻もまた同じである。

これはマインドのプラクティスではなく、またマインドに関係するものでもない。「クリスチャンは寝床からゆっくりと起き上がらなさい」と、我々が言うとき、これはまさにそのとおり行いうということである。しかし目を覚まさないように十分注意しなければならない。なぜなら山に入る能力というのは、眠りにあるからである。重要なことは怠惰を克服し、まどろみ始めるその瞬間に寝床から起き上がるということである。

山で、すべての霊はカルメルの乙女とその最愛の子と話をすることができ。カルメルの聖母マリアは、すべての女性のために涙を流し、全人類を守護している。

山では、カルメルの乙女はこげ茶色（カルメル会の）のチュニックを着て現れる。頭にはこげ茶色（カルメル会の）のマントをかぶり、王冠をのせている。そして手にはスカプラリオを持っている。これが褐色の乙女、山の乙女である。

* * *

第5章

識 別

霊は肉体の睡眠中に、聖なる山を彷徨すると前章で述べたが、その睡眠中に、霊は昼間していたのと同じ仕事をしたりする。

幽体離脱していることに気づかない商人は、肉体の外に出て店で商売をしている。また婦人服仕立屋の霊、整備士の霊、テント製造業者の霊、行商人の霊などが、睡眠中、昼間と同じ仕事に没頭しているのを見ることができる。それらの霊は、生身の体でいるものと確信し、眠ったままでさまよい歩いている。「肉体の外にいるよ」と誰かに言われたとしても、信じてないであざ笑うだけである。

肉体の外にいと気づけば、我々は世界の隅々まで瞬時に移動することができる。それゆえ、愛する夫の不在で悲しい思いをしている妻は夫に、また最愛の恋人のために身を焦がしている女性は恋人に会うことができる。母親は家を離れている息子のもとを訪ね、わが子の暮らしぶりを見ることができよう。

重要なことは鍵を知ることである。すなわち肉体の外にいと気づくための秘訣を知ることである。

その鍵とは“識別”である。昼間、次のように自分に問い掛けなさい。「私は肉体の中にいるのだろうか？ 肉体の外にいますのだろうか？」

そしてそのとき空中に浮くつもりで、軽くジャンプしてみるのである。もし浮いたならば、それは肉体は寝床で眠っていて、肉体の外にいとということである。それから空中に浮遊したまま、ハートの導くままに向かうとよいだろう。別居している人、遠方の息子、愛する人のところへと。

昼間、何か好奇心を引く物事を目にしたときに、そのように自問するとよい。喧騒、不思議なもの、死者との遭遇、遠くにいと友人との出会いなど、要するにいつもと違うものを目にしたときに自問するのである。仮に、あなたが通りを歩いているとき、しばらく会わなかった友人と出会ったとしよう。そのようなとき「私は肉体の中にいるのだろうか？ 外にいますのだろうか？」と自問してみるのである。

霊に深く焼き付けるために、日中いつも絶えずこの“識別”の鍵を使いなさい。そうすれば睡眠中もこの鍵を使うことになるだろう。昼間に行ったことは、すべて睡眠中にも行う。従って日中これが習慣化すれば、霊が肉体の外にいと夜間の睡眠中にも行うことになるのである。そして自問するとき、日中したのと同様にジャンプをする。そこで意識が目覚め、体が空中に浮かぶだろう。そうしてあなたは別居している人たち、遠方の息子、便りのない母のもとを訪れることができるのである。

睡眠中、霊は肉体の外にいと。重要なことは、霊が肉体の外をさまよっていることに気づくこと、そして遠くの地を訪れることである。

これが、“識別の鍵”である。

肉体の外で、純粋な心をもって、カルメルの乙女を呼べば、ナザレの聖母は姿を現し、話をするのできるだろう。また肉体の外で、受胎告知を願って天使ガブリエルを呼べば、夫婦に結びつくべき日時を知らせてくれるだろう。このようにして女性は聖霊のわざと恩寵によって、つまり聖霊の命令によって子を宿すことができるだろう。男性は睡眠中、天使と会話することができる。女性も、子供も、老人も、誰もが睡眠中に天使と話をするのできるのである。

肉体の外で、我々は天使を呼ぶことができる。そして我々の求めに応じ、て天使は現れ、神の言葉を教えてくれるだろう。

第6章

奇 跡

聖なる山を知っている者はみな、カルメルの乙女が疲れを知らない働き者であることを知っている。

しばしば帰依者は、不治の病から回復することがある。そのとき感激のあまりに「カルメルの処女の奇跡だ!」と驚きの声を放つ。しかし、カルメルの乙女が病人の体を治療するために、どれほど集中的に働かなければならなかったか、ということを彼は知らない。また悲劇的な死から救われた帰依者は、感激して「奇跡だ!」と叫ぶ。しかし、そのためにカルメルの乙女が払わねばならなかった限界に近い努力や、大きな犠牲、その仕事のすさまじさを彼は知らない。ここで、カルメルの乙女の奇跡をいくつか取り上げてみよう。

その1

アルフレッド・ベジヨはスクーター（二本マストの軽走船）に乗っていたが、カルメルの乙女に懇願して溺死から救われた。スクーターが爆発したのは、彼がパナマ湾からバランキヤ市へと航海していたときであった。帆船は荒波にのまれ、見えるものといえば空と水だけだった。希望のひとかげらさえなかった。アルフレッド・ベジヨは一枚の小さな板きれにしがみつきながら、カルメルの乙女に懇願した。こうして彼は救われたのであ

る。救助が間に合ったのだ。そして感激のあまり「奇跡だ!」と叫んだ。しかしカルメルの乙女が自分を救うために、いかに大きな努力をはらったかを、彼は知らなかった。

その2

リオアチャ出身の有名なエリートであるホセ・ブルデンシオ・アギラールは、荒波をきって自分のスクーターで大西洋を航海していた。そのとき高波が荒れ狂う恐ろしいハリケーンにのみ込まれたのである。スクーターは危うく大洋の底に沈むところであったが、彼はカルメルの乙女に心から祈った。そして懸命に働いた乙女のおかげで、災難から免れることができた。彼は「奇跡だ!」と叫んだだけだった。

その3

エステル・ロサノ夫人はカルメルの乙女を呼んで、陣痛を全く伴うことなく一人の美しい女の子を出産した。夫人は「奇跡だ!」と叫んだが、カルメルの乙女が自分を援助するためになさねばならなかった科学的な大仕事には気づかなかった。ありがたく思った夫人は、カルメルの乙女の名を娘の洗礼名とした。

その4

1940年、ランチ（小舟）に乗ってタカモチョからガマラへ旅をしていたエミリア・エルナンデスという名の女性が、バケツに水をくみにいって川の中に落ちた。彼女是一本の小枝にしがみついて、マグダレナ川（コロンビアを南北に流れる川）の激流に四時間も流された。そのときカルメルの乙女を呼んで、死のかぎ爪から救われた。ランチの名は「マンサナレス号」であった。カルメルの乙女は、この女性を救うために大奮闘しなければならなかった。

その5

コロンビアのサンタマルタの良家の出である一人の船乗りが海難に遭った。数時間海の中に浸かっていたが、ついに救出されて、意識を取り戻した。そのときみな声をそろえて「カルメルの乙女の奇跡だ!」と叫んだ。

その6

あるとき、トリマ山（コロンビア中西部の火山、標高 5125m）の峠を登っていた一人の男が、一匹の野犬に襲われた。獣は夜の闇の中で吠えていた。男は怯えながらカルメルの乙女を呼んだ。すると獣は恐れおののいて逃げ去った。疑いの余地なく、その獣は奈落の闇の生き物であった。

その7

乗っていた飛行機が粉々に砕け散った。そのとき、命が助かった女の子について何が言えるだろうか。国外に逃れた多数の子供をドイツからアメリカへ移送していた際に、その飛行機は合衆国で爆発した。子供は全員死亡したが、飛行機から離れたところに、一人の女の子がかすり傷ひとつ受けずに生存していた。どうしてそうなったのかを、誰も説明することはできない。カルメル乙女がこの驚くべき仕事を、このすばらしい奇跡を成し遂げたのである。運命の法によって、その女の子はまだ死ぬことにはなっていなかった。そのためにやむなくある干渉が必要となった。それがまさしくカルメルの乙女による干渉であった。このことを我々は認めなければならない。

* * *

第7章

自然

自然は、母である。そして常に処女である。自然は、いつも処女であり、変わることなく母である。それは厳しくて優しい母である。

自然の意識は、内気な小鳥に巣作りを教える。そして樹木の心臓にも、地を這う小さな虫の心臓にも、自然の意識は脈打っている。花崗岩でできた巨岩が、峨々として青空に突き刺さるかのようにそそり立っている。その上を、鷲は勇猛な翼を広げ空高く飛翔するが、その鷲の心臓にも自然の意識は脈打っている。

自然の意識は、幼な子に母の乳を探すことを教え、鳥には飛び立つことを教える。

自然の意識は、万物に形を授ける。芳しい香を放つ花冠^{こしら}を拵え、また無限の壮大なオーケストラの響きの中で、星々の運行を導く。

自然は、厳しくて優しい母である。山深くに入ると、荘厳な神殿の中に母の姿を見ることができる。彼女は黄金の冠をかぶり、まっ白な輝くばかりのチュニックを身につけている。そして荒れ狂う自然界の力を統御している。

人類があまりにも母を悩ませるとき、すべての母親がわが子にするのと

同じことを彼女は行う。子供を喜ばせるためにおもちゃを与え、またわが子を楽しませるために発明家のマインドにラジオや飛行機、自動車などのアイデアを授ける。そうするうちに、子供たちは成長して神の英知を学ぶための準備が整うのである。

地、水、火、風の無邪気な天使たちはみな、世界の祝福された母神に従っている。

マリア、アドニア、インソベルタ、イシス、アスタルテは自然の天上の処女を常に象徴してきた。

自然は、偉大なる作業場であり、そこで神が働く。

自然は、世界の母なる処女の神殿である。

* * *

第8章

ノーシス教会

それではカルメルの乙女の帰依者に、真実のキリスト教の道を教えよう。まず使徒、聖パウロによる『テモテへの第一の手紙』第3章を勉強することにしてしよう。

「もし人が監督の職を望むなら、それは良い仕事を願うことである」とは正しい言葉である。

さて、監督は、非難のない人で、ひとりの妻の夫であり、自らを制し、慎み深く、礼儀正しく、旅人をもてなし、よく教えることができ、酒を好まず、乱暴でなく、寛容であって、人と争わず、金に淡泊で、自分の家をよく治め、謹厳であって、子供たちを従順な者に育てている人でなければならない。自分の家を治めることも心得ていない人が、どうして神の教会を預かることができるか。

彼はまた、信者になって間もないものであってはならない。そうであると、高慢になって、悪魔と同じ審判を受けるかも知れない。

さらにまた、教会外の人々にもよく思われている人でなければならない。そうでないと、そしりを受け、悪魔のわなにかかるであろう。

それと同様に、執事も謹厳であって、二枚舌を使わず、大酒を飲まず、利

をむさばらず、きよい良心をもって、信仰の奥義を保っていなければならない。

彼らはまず調べられて、不都合なことがなかったなら、それから執事の職につかすべきである。

女たちも、同様に謹厳で、他人をそしらず、自らを制し、すべてのことに忠実でなければならない。

執事はひとりの妻の夫であって、子供と自分の家とをよく治める者でなければならない。執事の職をよくつとめた者は、良い地位を得、さらにキリスト・イエスを信じる信仰による、大いなる確信を得るであろう。

わたしは、あなたの所にすぐ行きたいと望みながら、この手紙を書いている。万一わたしが遅れる場合には、神の家でいかに生活すべきかを、あなたに知ってもらいたいからである。神の家というのは、生ける神の教会のことであって、それは真理の柱、真理の基礎なのである。

確かに偉大なのは、この信心の奥義である。「キリストは肉において現れ、^{みづかい}霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民に間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた」。

これが使徒聖パウロから、敬虔で神をおそれる聖テモテへの手紙である。

これが、聖アウグスティヌス、聖トマス、アレクサンドリアのクレメンス、ヒッポリトゥス、エピファニウス、スペインに多数の修道院を設立したカルボクラテス、テルトゥリアヌス、聖アンブロシウス、殉教者の聖ステファノ、聖ユスチヌスなどの神聖な教義である。

これが、キリストが密かに七十人の弟子に教えた古代の教義である。そのためにエルサレムの聖人たちは迫害を受けた。

これが、偉大なる枢機卿の教義、ノスティックの教義である。原始カトリック・ノーシス教会の高位の者たちは、その教義に従っていた。

これが、パウロが鎖につながれてローマに着いたときに、そこで説かれていた古代キリスト教である。また、カルメルの乙女がエルサレムの神殿の森厳な日陰で学んだキリスト教である。

使徒聖パウロの他のいくつかの教えを見てみよう。

愛を追い求めなさい。また、霊の賜物を、ことに預言することを、熱心に

求めなさい。

異言を語る者は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語るのである。それはだれにもわからない。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである。

しかし預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰めるのである。

異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める。

わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている。

だから、兄弟たちよ、たといわたしがあなたがたの所に行って異言を語るとしても、啓示か知識か預言か^{おしえ}教かを語らなければ、あなたがたに、何の役に立つだろうか。 (『コリント人への第一の手紙』 14:1-6)

このようにタルソの聖パウロは、すべてのよきクリスチャンたちに愛を実践し、霊の賜物を求め、とりわけ預言することを勧めた。

もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。

もし解く者がいないときには、教会では黙っていて、自分に対した神に対して語っているべきである。

預言をする者の場合にも、ふたりか三人かが語り、ほかの者はそれを吟味すべきである。

しかし、席にいる他の者が啓示を受けた場合には、初めの者は黙るがよい。あなたがたは、みんなが学びみんなが勧めを受けるために、ひとりずつ残らず預言をすることができるのだから。

かつ、預言者の霊は預言者に服従するものである。

神は無秩序の神ではなく、平和の神である。

聖徒たちのすべての教会で行われているように、婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されていない。だから、律法も命じているように、服従すべきである。

もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会で語

るのは、婦人にとって恥すべきことである。

それとも、神の言^{ことば}はあなたがたのところから出たのか。あるいは、あなたがただけにきたのか。

もしある人が、自分は預言者か霊の人であると思っているなら、わたしがあなたがたに書いていることは、主の命令だと認めるべきである。

もしそれを無視する者があれば、その人もまた無視される。

わたしの兄弟たちよ。このようなわけだから、預言することを熱心に求めなさい。また、異言を語ることを妨げてはならない。

しかし、すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい。

(『コリント人への第一の手紙』 14:27-40)

よきクリスチャンはみな、聖霊と預言を受けることができる。しかし預言者になりたい者は、完全に純潔で聖人でなければならない。

われらの主イエス・キリストの教会は、この世のものではない。彼自身、こう語った。「わたしの国はこの世のものではない」。(『ヨハネ』 18:36) 生ける神の山には、肉眼では見えないが、霊と魂の目には見える教会が一つある。これは、「キリスト」と預言者たちが属する原始ノーシス教会である。その教会には司教、大司教、助祭、副助祭、および生ける神の祭壇で儀式を司る司祭がいる。その目に見えない教会の総大司教は、イエス・キリストである。

クリスチャンはみな、霊と魂でその教会に行くことができる。本書の第四章と第五章で、意識をもったままで肉体を離脱し、地球のいかなる遠いところへも行くことができる秘訣を教えた。人間ならば誰もが、睡眠中にノーシス教会を訪れることができる。そしてその神聖な教会でカルメルの乙女や彼女と一緒にいる聖なる天使たちに会うことができるだろう。

神の教会の偉大なる聖人たちはみな、ノーシス教会を訪れる。金曜日と日曜日の夜明けにはミサと聖体拝領があり、クリスチャンはみな、本書の第四章と第五章に示した教えに従って、そのミサに参列しパンとワインの聖体を拝領することができる。またその教会では帰依者全員に預言のしかたを教えている。

ノーシス教会では玉座に着いているキリストに会うことができる。ノスティックはみな、キリストと個人的に話すことができるのである。

祭司ヨセフと結婚したとき、マリアにはあらゆる懊悩が続いて起こった。しかしマリアはエジプトの密儀に参入した。

ノーシス教会ではクリスチャンは預言のしかたを習う。

重要なことは、完全なる聖性と純潔の道を歩むことである。

『完全なる結婚』『ベルの革命』の中で、性の偉大なる神秘を徹底的に究明した。宇宙の中で最も壮大な秘密を著したその本を、是非読んで勉強していただきたい。

全人類が安らかでありますように。

序

【カルメル】 イスラエル北西から地中海岸まで連なる聖なる山。全長約26 km、最高峰545m。スペイン語で「カルメン」。

【アスタルテ】 フェニキア人、カナーン人の崇拜した豊穡と生殖の女神。

【マーヤー】 仏陀の生母、摩耶夫人。

【主の祈り】 「マタイ」6:9-13、「ルカ」11:2-4。キリストが弟子たちに教えた祈り。祈りの結びの言葉「御国と力と栄光はとこしえに汝のものなればなり。アーメン」は、最古の、また最良の写本では欠けている。それは、もとの祈りの一部ではなしに、礼拝用に追加されたものとされている。

【アベ・マリア】 「ルカ」1:28、42。

第1章

【こげ茶色の】 ^{チャニフク}carmelita には“カルメル会の”という意味もあり、カルメル会の修道服の色にちなむ。預言者エリアとその弟子エリゼオの指導の下にカルメル山に住んでいた修道士からカルメル会が起こったといわれているが、歴史的記録によれば、1156年にイタリアの巡礼、聖ベルトルドがカルメル山に建てて始めた。パレスチナ十字軍の失敗とともにヨーロッパ西部に移り、1245年には托鉢修道会となった。

【アンナ】 聖女。聖ヨアキムの妻。祝日7月26日。アンナはギリシア語で、そのヘブライ語ハンナは“聖龍”の意。

【ヴェスタの巫女】 終生（一説には30年）の貞節を誓い、ローマにおけるかまどの女神ウェスタの祭壇に燃える不断の聖火を守った四人（後には六人）の処女。

【ローマの七つの丘】 七つの丘を中心に古代ローマ市が建設された。

【聖ステファノ】 ?～35年。エルサレム教会の中心人物の一人。最初のキリスト教殉教者。祝日12月26日。【使徒行伝】第6-7章参照。

第2章

【秘蹟】 一般にはキリストの定めた恩恵を受ける手段、方法。ローマカトリック教会では秘蹟、ギリシア正教会では機密と言い、洗礼、聖体、告解（悔悛）、堅信、婚姻、叙階（品級）、終油（病者の塗油）の七秘蹟があるが、プロテスタント教会では聖礼典と言い、洗礼と聖餐の二つのみ。

【シオン】 エルサレム南東の丘。ここにダビデが宮殿を築き、その子ソロモンが神殿を建て、その後、長くユダヤ人の宗教・政治の中心地となった。

第3章

【レビ族】 ヤコブとレアの子であるレビの子孫で、イスラエルの祭司部族。

第4章

【スカプラリオ】 肩から前後に垂らす修道士の肩衣。^{かたぎぬ}修道会によって大きさ、色が違う。ふつうスカプラリオといえば、カルメル会の茶色のものを指す。

第8章

【聖アウグスティヌス】 354～430年。大密儀のマスター。アフリカのヌミディア生まれ。古代キリスト教最大の神学者。主著『告白』『神国論』『三位一体論』。祝日8月28日。

【アレクサンドリアのクレメンス】 150?～215?年。アテネ生まれのキリスト教史上最初の体系的な神学者、教会著述家。キリスト教とギリシア哲学を結ぶ。オリゲネスの師。

【ヒッポリトゥス】 170?～235年。聖人、殉教者、ローマの教会著述家。聖イレネウスの弟子で博学な神学者。主著『哲学的思想』。祝日8月13日。

【エビファニウス】 439～496年。聖人。イタリア・パヴィアの司教。祝日1月21日。

【カルボクラテス】 2世紀ごろのアレクサンドリアのグノーシス派学者。

【テルトゥリアヌス】 160?～222?年。カルタゴ生まれのキリスト教神学者。最初の偉大な教会著述家。ギリシア文化に対抗したラテン神学の創始者。著書『護教論』

【聖アンブロシウス】 339?～397年。ドイツ生まれのミラノ司教、偉大な神学者。アウグスティヌスをキリスト教に導いたという。祝日12月7日。

【聖ユスチヌス】 100?～165?年。シリア生まれ。初期キリスト教の護教家、神学者、哲学者、殉教者。祝日6月1日。

【愛】 愛徳。対神徳の一つ。神への愛、隣人への愛を指す。